

浄土

6
the JODO
1993

5、6月合併号

随想

利根川 裕 平光善久 小川喜一郎

羽田恵三 夏 攸吾

生前葬儀 大室了皓

旅=比叡山行脚 菊池東太

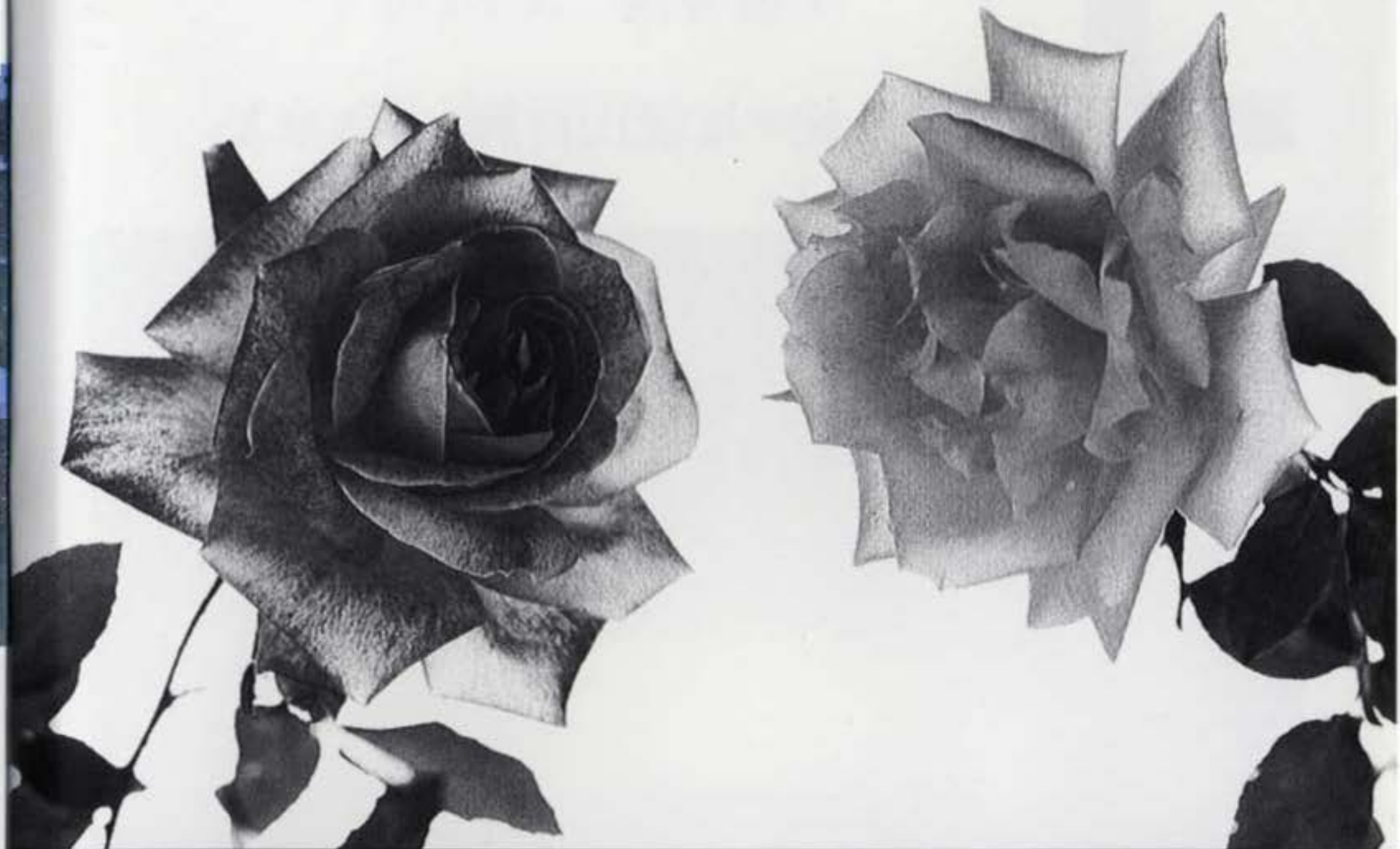


法然上人鑽仰会発行

わかり合うことは、

語り合うことです。

以心伝心。古来から日本では、黙っていて
も心は通じるものといわれてきました。
でも、やっぱり話さなければわからないこ
とってありますよね。もっとお互いがわか
り合えるために。日本テレコム・0088
でゆっくりおしゃべりしてみませんか。



0088なら、もっと気軽に、もっと長〜く話せます。

- 例えば、東京(03) ↔ 大阪(06)間なら
25.4%もおトク。

※平日夜7時に15分間電話した場合

- かけ方は、アタマに**0088**を回すだけ。
- 月々の基本料金は一切ナシ。
※NTTの基本料金は従来とおりです。
- 電話機・電話番号もそのまま使え、
ご自宅での工事もなし。

安い市外電話

0088

.....
0088のことならなんでもお気軽にお電話で。

日本テレコムお客様センター

☎**0088-82**(無料)

または、☎**0120-0088-82**(無料)

●受付時間 9:00~20:00(年中無休)

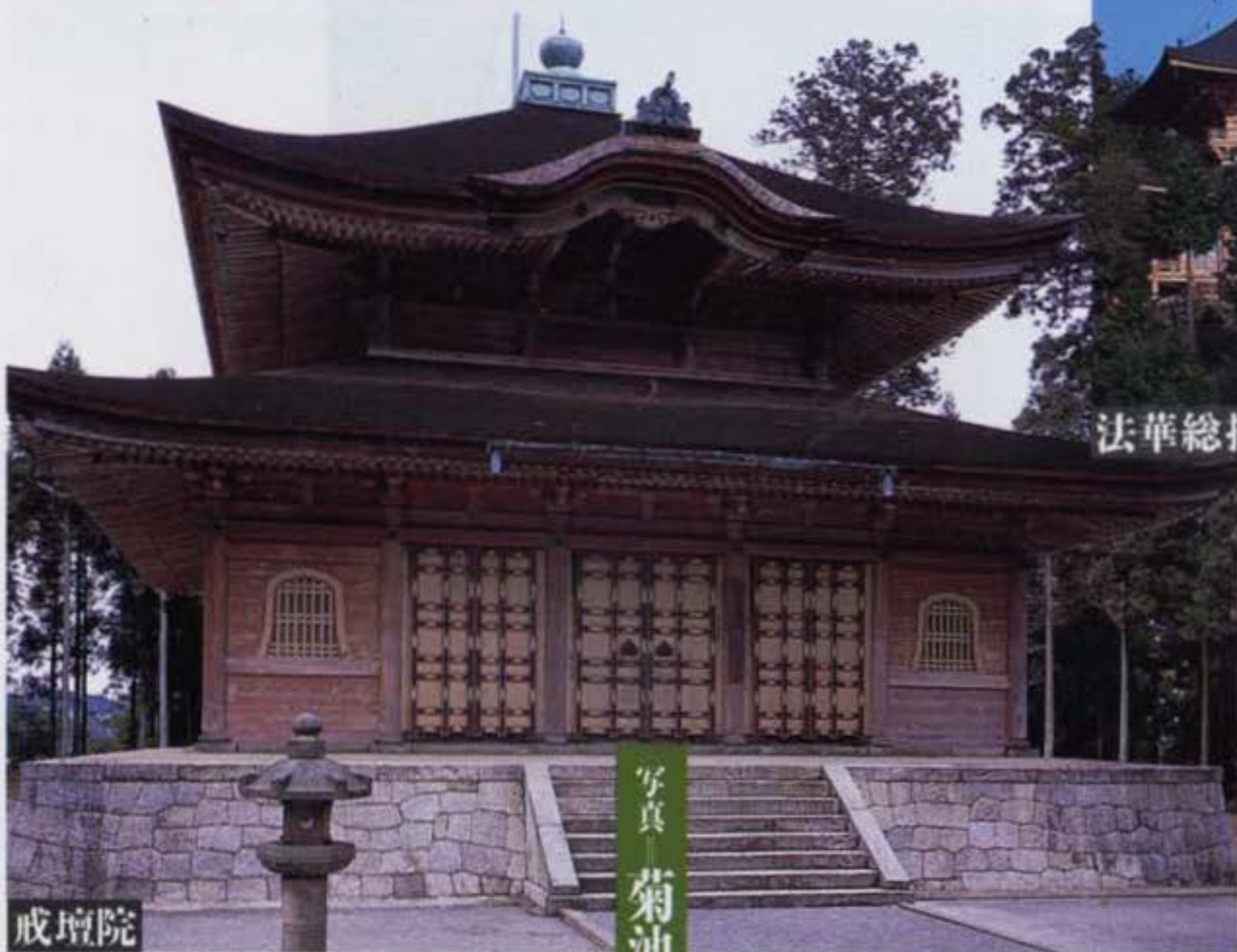
比叡山行脚



根本中堂



法華總持院東塔



戒壇院

写真 菊池東太





横川中堂



椿堂



にない堂



浄土

1993/5・6月合併号

目次

比叡山行脚(口絵).....写真	菊池東太	3
文学者の最後.....利根川	裕	8
地獄から浄土を仰ぐ.....平光善久		12
四十八年目の夏.....小川喜一郎		16
旅=比叡山行脚.....写真と文	菊池東太	20
今現在説法.....羽田恵三		28
手助けをする、ということ.....夏	攸吾	34
生前葬儀.....大室了皓		38
法然上人鑽仰会会則.....		46
編集後記.....		48

表紙撮影=「落日」落合泰三

文学者の最後



利根川 裕

亀井勝一郎さんに「文学者の最後」という文章がある。その中の一節――

昭和十八年二月二十八日、倉田百三先生は五十三歳で亡くなった。その前年の暮であつたと思うが、私は病床をお見舞いしたことがあつた。そのとき百三先生は爪ののびた痩せ細った手で、虚空に何かを描くような恰好をしながら、「亀井、浄土はほんとう

にあるのか」とたずねられた。私は返答に窮したことを忘れずにいる。「自分が瞑目したとき、壮嚴な浄土が絵のように眼前にあらわれないものだろうか。そんな空想をすることがある」といって先生はかすかに微笑されたが、臨終に近い人のこの言葉は、その後長く私の念頭にあつた。人間は最後には、何をもって瞑目すべきであるのか。

この亀井さんの文章には、いろんな文学者の死が語られている。もう一つだけ、ここにあげてみる。

外村繁（とむら）のように浄土真宗に心を傾けた作家は、最後には念仏をとなえて、安らかに眠るであろうと私は想像していたし、そうあってほしいとも思っていた。しかし臨終の前日に病床を訪れたときは、猛烈な頭痛を訴えて苦しみつづけていた。弥陀の慈悲も救うことはできないのであろうかと、私は暗然とした。ただ頭痛の苦しみだけで息絶えたのだろうか。

このような文章を記した亀井勝一郎さんは、昭和四十一年十一月十四日、国立がんセンターで亡くなった。五十九歳であった。

わたしは、亀井勝一郎さんに、たいへんお世話になった人間である。こちらから一方的に「弟

子にして下さい」といい、そのまま弟子面して居据わってしまったようなものであった。こちらが志願して弟子入りしたのだから、このかたこそ、わたしの「先生」であるし、事実「先生」と呼びしていたが、第三者にこのかたのことを語るときには、「亀井先生が……」というのが、かえって特別の意味がつくように思われて、「亀井さんが……」といういいかたをしてきた。そんなわけで、この文章も、先生のことを亀井さんと記しているのである。

その亀井さんは、死の二カ月ほど前、北海道文学展のために三十枚の色紙を書いている。その一枚に、親鸞の言葉を記したものがある。

なごりおしく思へども 娑婆の縁つきて
ちからなくしてをはるときに かの土へは
まゐるべきなり 急ぎまゐりたき心地のな
きものを ことにあはれみたまふなり（色

紙原文のまま)

これにはなお、添え書きがある。

ここ二、三年病床に臥して死ぬのではない
かと思ふとき、この一節が浮かんでくる。

亀井さんにとりついた死床は、ガンであつた。
最初の入院から亡くなるまでの二カ年数カ月の
間に、結局五度入院し、三度手術ということに
なつた。そして手術のたびに、はっきりと段階
的に痩せ細っていった。直接の死因を、担当医
師は、食道ガンの肝臓転移と発表した。

この二年半ほどの間、わたしはつねにお側に
いて看病させてもらったわけではないから、亀
井さんの闘病生活のすべてを知っているなどと
はいえない。が、かなり度々お顔を見にいつて
いたから、亀井さんがどんなふうに死と向かい
あつていたかは、わたしなりに察しがつかない
ものでもなかった。

一番最初に、先生入院と聞いて病院へ駆けつ
けると、わたしへの第一声が、

「ガンだよ。ううん、間違いなくガンなんだよ、
家のものには言っていないがね」

であつたのには、こちらのほうがうろたえ、

「そうですか」

と答えたまま、つぎの言葉が出なかつた。以後、
次第に近づいてくる死をはっきりと自覚しなが
ら、いたずらな興奮や惑乱をついにお見せにな
らなかつた。

亀井さんは、「私は浄土真宗の信徒である」

とみずから書いている。さらに、「私は自分を
宗教家とは思っていない。念仏の忠実な行者で
もない。しかし真宗の信徒と称するのは、親鸞
によつて開顕された弥陀の本願力なくしては、
人間として再生する祈念など思いも及ばなかつ
たその謝念による」と記している。

亀井さんには、『親鸞』という著作もある。

がんセンターのベッドでは、ほとんどみずからの死について語ることもない平静な病者であったが、その『親鸞』の中で、この師の臨終のさまを書く亀井さんの文章は、白熱した率直さに満ちている。たとえばこんな一節。

（入寂のとき）親鸞の唇から洩れた念仏とはいかなるものであったか、私は音声をじかに聞きたいと切に思う。九十年の生涯をこめて、呻くがごとくつぶやいたのであるうか。それとも静かに清浄な音声であったか。親鸞の晩年はやはり凡夫の晩年であり、心の憩いはついに得られなかったようだ。悟りをひらいた聖人の面影などなかったように思われる。

亀井さんには、『四つの誕生日』という着想がある。第一の誕生日とは、いうまでもなく生

れ出た日である。第二の誕生日とは、青春時代の自我の目ざめである。「人生とは何か」「われとは何か」というような生涯の難問を自分に課するときである。第三は再生の祈念の湧きおこる日である。「宗教的誕生日」と名づけてもいい。世の苦悩や辛酸を味わったうえ、ふたたび生れ変って真の安心立命を得たいと念ずる「自覚の日」でもあり、「発心の日」でもある。そして最後に、第四の誕生日とは死の日である。「わが身滅びて神仏として誕生する。不滅なるものとして人心に還る日」である。

亀井勝一郎さんが死をどのように迎えたか、それを臆測することはつつしまなければならないことに類するが、親鸞の徒であった以上の言説は、それをうかがい見る手がかりとはなるであろう。不肖の弟子は、それを、はるかあと追いつきばかりである。

（作家）

地獄から浄土を 仰ぐ



平光善久

二十世紀末まで、指折り数えることのできる歳月になった。そのことを実感しはじめたのは、一九九〇年（平成二年）の賀状の文面を考えながら、「21世紀まで あと11年 4018日」と計算して、賀状に刷り込んで挨拶してからであった。それからすでに三年が過ぎて、二十一世紀

まで三千日台に入って、やがては過ぎ去る時間を分秒の単位で数えなければならぬ今日このごろである。

大正一三年（一九二四）八月生まれの私にとつては、二十世紀をまるまる生きることができるとすれば、二十世紀の四分の三を生きた計算

になる。しかもその二十世紀は、世界的に戦争の続発した世紀であり、特に日本の立場から振り返れば、世界の大国を相手に戦って勝利も敗北も体験し、いまや経済的にはゼロから一〇〇までの国富を体験することになりそうである。そのことを私個人のことで数えてみれば、明治三〇年（一八九七）生まれの父、明治三六年（一九〇三）生まれの母の長男として生まれたことの因縁を加えてみれば、二十世紀をはじめから終りまでリレーしたことになる。

カンボジアでの国連平和維持活動（PKO）に派遣されていた日本人文民警察官のうち、五月四日に重軽傷を受けた七人が、六月一日に帰国した。同時に襲撃を受けた高田警視は死亡（戦死と報道したマスコミもあった）し、八木警部

補と谷口巡査部長は重傷であった。新聞報道によると、八木警部補は背中に被弾し長期入院が必要であり、鈴木巡査部長も右胸部を撃たれたほか体調も崩して二、三カ月の入院ということであった。八木警部補の車椅子姿（『毎日』、鈴木巡査部長の車椅子（『中日』『岐阜』『朝日』『日本経済』）、頭に包帯を巻いた川野辺警部（『中日』『朝日』）の姿も写っている。

五月四日に襲撃を受けた日のことを、「襲撃・地獄だった」という見出しをつけて、中日新聞は五月八日付の朝刊で報じていた。またその紙面には、「五月七日午後四時、岡山県倉敷市水島南幸町の実家に無言の帰宅した高田晴行警視のひつぎ」の写真が掲載され、「三歳の長男と一歳の二男が、父親のひつぎをのぞいては『お父さん、お父さん』と呼び掛けていた」と説明

されていた。

「実家に無言の帰宅」とか、「襲撃は地獄」という文字に出会ふと、私の肉体の中からも起きあがってくる無念の気持があつた。

今から四九年前の昭和二十年（一九四五）の七月三十一日午後二時、華中戦線の津浦線（天津―浦口）の列車を運転中、P51戦闘機からの機関銃撃を左脚に二発受けた。一発は大腿部、もう一発は足首の上を貫通した。列車には中国の民間人と日本の軍人で満席であつた。夜間は華中鉄道の社員が運転し、危険な昼間は鉄道兵が運転することになっていた。

機関室から頭を下にして路盤の傾斜面に落ちた私は、やがて機関車のすぐ後部の炭水車に乗っていた警乗兵二人に抱きあげられ、担架に乗

せられて列車の荷物車に助けあげられた。それから四時間ほど後に、担架のまま兵站病院^{へいたん}の手術室に担ぎ込まれて、左脚大腿切断手術を受けたのであつた。あと半月で満二十一歳になる私は、兵隊としては最下級の陸軍二等兵であり、負傷した翌日付で陸軍一等兵に昇進し、左足一本の代償としては、兵籍簿に兵精勤章附与と書き込まれているだけである。

半世紀も前の戦傷体験の一端を書き並べたのも、ほかではない。担架の上で自らの血の海に浸かり、受傷七時間目に切断手術を受けた私は、貫通銃創を受けた直後に銃弾の進入孔（親指くらい）、貫通孔（鶏卵大と現認証明書に書いてあつた）を見ただけである。その二つの穴は未だ血が惨み出す前で、自身の刺身のような青さを保っていたが、やがて血が噴き出してからの傷痕

は見えていない。そして当然のことではあるが、担架に乗せられて列車の荷物車に担ぎ上げられ、岐阜駅で大隊長の公用車に移され、兵站病院の手術室に運ばれる過程も、手術が終って病室のベッドへ運ばれる過程も、自分の眼で見えてはいない。そんな自分を思い出すとき、今度のカンボジアでのPKO事変（敢えてこの文字を使いたい衝動が湧きあがって来て）、その日のうちに情況がテレビ電波に乗って故国あるいは留守宅に報されたり、翌日の新聞にカラー写真で否応なく突きつけられたりすることを、不思議と思わないではいられない。

五月四日のPKO隊員の戦死（と報道したテレビもあった）と負傷者の出たこと、「実家への無言の帰宅」関連の記事や、病院に収容されて、ストレッチャーで運ばれて手術を受ける負傷者

の新聞記事やテレビの報道を、半世紀前に血の海に浸かった自分の姿を重ね合わせていることに気づかないではいられなかった。異なっているところは、半世紀前には担架に車輪がついていなかったが、今度は車輪のついたストレッチャーに変っていたことが、最も大きな変化であった。「襲撃は地獄だった」も、「実家に無言の帰宅」も、日清・日露の明治の戦争も、大正の第一次世界大戦も、満洲・上海と続いた昭和の事変も、そのあと大東亜戦争と名づけた太平洋戦争も、日本から武器を取りあげて世界中がハイテク戦争に狂奔し、一方ではゲリラ戦争もくすぶっている地球は、世紀の終末、と言うよりは、地球そのものの終末を予感させるこのごろである。救いを自我に依頼するよりも、神仏の加護に頼るよりほかはないようである。

（詩人）

四十八年目の夏



小川喜一郎

「去年の八月十五日に、所用あって乗ったタクシーの運転手との会話である。『戦争が終わって四十七年も経ったんだね。そういえば、あの日も今日と同じくらい暑かったな』。」

「はあ、そうですね。」
「正確な温度は記憶にないけれど、やはり三十二、三度はあったんじゃないか。」
「それじゃ、冷房はどうだったんです？」

「冷房？ そんなものあるはずなかったろう。」

「そうすると、うちわか扇子ですか。」

「それだって、戦争には余計な品だから、よほど気のきいた人ぐらいしか持つてはいないよ。」

「してみると、昔の人は我慢強かったんですね。クーラーがきかないなんて文句を言ったら罰が当たりますよね。」

「ま、そうなるかな。」

見たところ、うしろ髪に若干白いものも見え
るし、どうみても中年のドライバーである。それなのに、話はなかなか噛み合わない。この人は、もしかしたらあの頃、内地ではなく、どこか外国にでも住んでいたのかしら、と考えていたら、

「実はね、お客さん。私、ちょうどその年の八月に生まれているんですよ。ですから、まだ産

衣に包まれていたんで何も知りません。」

「ほほう、昭和二十年生まれなの。」

「はあ、つまりそういうことです。」

なるほど、ゼロ歳の赤ん坊だったのなら無理もない。しかし、あの敗戦の猛暑の頃に生まれた子が、もう四十代の後半の年齢になろうとしている。人生五十年時代の話なら、この運転手氏はすでに晩年の域に達しようとしているのだ。

私はそれを聞いて、以後絶句したまま目的地に着いて車を降りた。と同時に、あの酷暑の日の正午に聴いた玉音放送やら、無念の涙を流した自らの姿を改めて思い起こしていた。昭和二十年八月十五日、私は大学一年に在籍していた。六月をピークに、沖縄への特攻作戦は日夜多くの若い生命を南海に散らし続けていたし、私は私なりに、ひそかに自身の生涯を長くて来年一

杯のものと覚悟していた。戦後の虚脱感などは今までにたくさんの方が記しているので今さら改めて書く気など無いが、あの酷烈無残な暑い一日だけは、恐らく死ぬまで忘れずにいるに相違ない。

*

わが小寺の檀家のお一人の女性を、仮りにAさんとしておく。Aさんは女学校の挺身隊で動員されたさる工場で、同じく勤労働員されてきていたM大学のBさんと知り合い、激しい恋愛の末、いずれBさんが大学を卒えたら結婚することを誓い合っていた。が、当時の大学生のほとんどがそうであったように、Bさんは海軍飛行予備学生として大津の航空隊に入隊し、以後、二、三の海軍基地を転々とした末、極端な航空機不足から特殊潜航艇回天の搭乗員に異動され

るところを、粘りに粘って初志の航空要員になるのを許され、予備士官になったところで鹿児島県鹿屋の基地へ配属された。Bさんは、そこが沖縄特攻作戦の最前線基地であることを知っていたかどうか今もって定かでない。昭和二十年四月のさる日、AさんはBさんからの便りで東京からはるばる鹿児島まで面会に行き、わずか三十分と限られた短い時間内で二人の再会を果たした。かつて東京の駅頭で見送ったBさんの学生服姿は、すっかり海軍少尉の凛々しい軍装に変わっていて、思いなしか眼光も鷹のように鋭くなっていたという。Aさんはその当時から篤信の人だったので、京都の佛師に頼んで作った小さな木彫の観音像をお守りとして渡し、Bさんは今でいうプラスチックのような飛行機の風防ガラスで作った小箱に、自らの髪の毛と爪

を入れて渡してくれた。今時の若者のような抱擁もなければ、むろん唇を合わせることもない、それが最後の別れであつた。ほどなく、Bさんが鹿屋の基地を発進し、沖縄の空で短い生命を散らしたことを知る。Aさんもその時、自分のあまりにも短かつた青春の終わりを痛感したという。そしてほどなく、青葉の季節が過ぎ炎熱の夏が来て、Aさん自身の戦争も終わってしまった。不幸なことに、あの年の五月の青山・赤坂辺りの空襲で両親と弟君も失つたAさんにとつての八月十五日は、おそらく私などとは比較にならないくらい暑い暑い孤愁の一日であつたに違いない。

*

Aさんは今年六十八歳。ついに生涯、人に嫁すことなく独居を続けている。両親と弟の眠る

墓の中には、あの鹿屋で渡されたBさんの遺髪と爪もひっそりと納められている。まだ二十代の若さで最愛の人を喪つたAさんは、あえて常凡の女性の幸福を拒否して四十八年の歳月を歩み通してきた。Aさんに万一の日が来たら無縁になるからと、つい先日、小寺との永代供養の約束もとじ交わした。四十八年前のAさんの面影を、今のAさんの上で偲ぶのはむずかしいが、でも、戦火の中で一生に一度の恋に心を燃やした乙女は、さぞや美々しく可憐であつたろうことは想像に難くない。

昨年の八月十六日、私は息子と二人で京都五山の大火文字送り火を拝みに出かけたが、旧盆の天空を焦がす祖霊への火炎に合掌しながら、私はなぜかしきりにそんなAさんの姿を瞼の裏に浮かべ続けていたのだつた。

(作家)

比叡山行脚

写真と文 Ⅱ 菊池東太

真夜中に出峰



わたしが初めて比叡山に行つたのは、高校時代の修学旅行である。くねくね曲がつたドライブウェイをバスで登ると、そこには大きなお堂があつた。根本中堂だ。その前でバスガイドが長々と説明していた。その当時、自分が将来写真家になり、取材でこの場所に再び訪れることになるとは、考えてもい

なかつた。だからというわけではないが、根本中堂を見たということ以外はなにも記憶に残っていない。

それから約二十年……。

滋賀県大津市坂本。その北に飯室谷と呼ばれている、木々が鬱蒼と茂った小さな谷がある。まだ肌寒い。しかも、湿度が高い。顔にあたる空気はヒンヤ

信者に加持をする



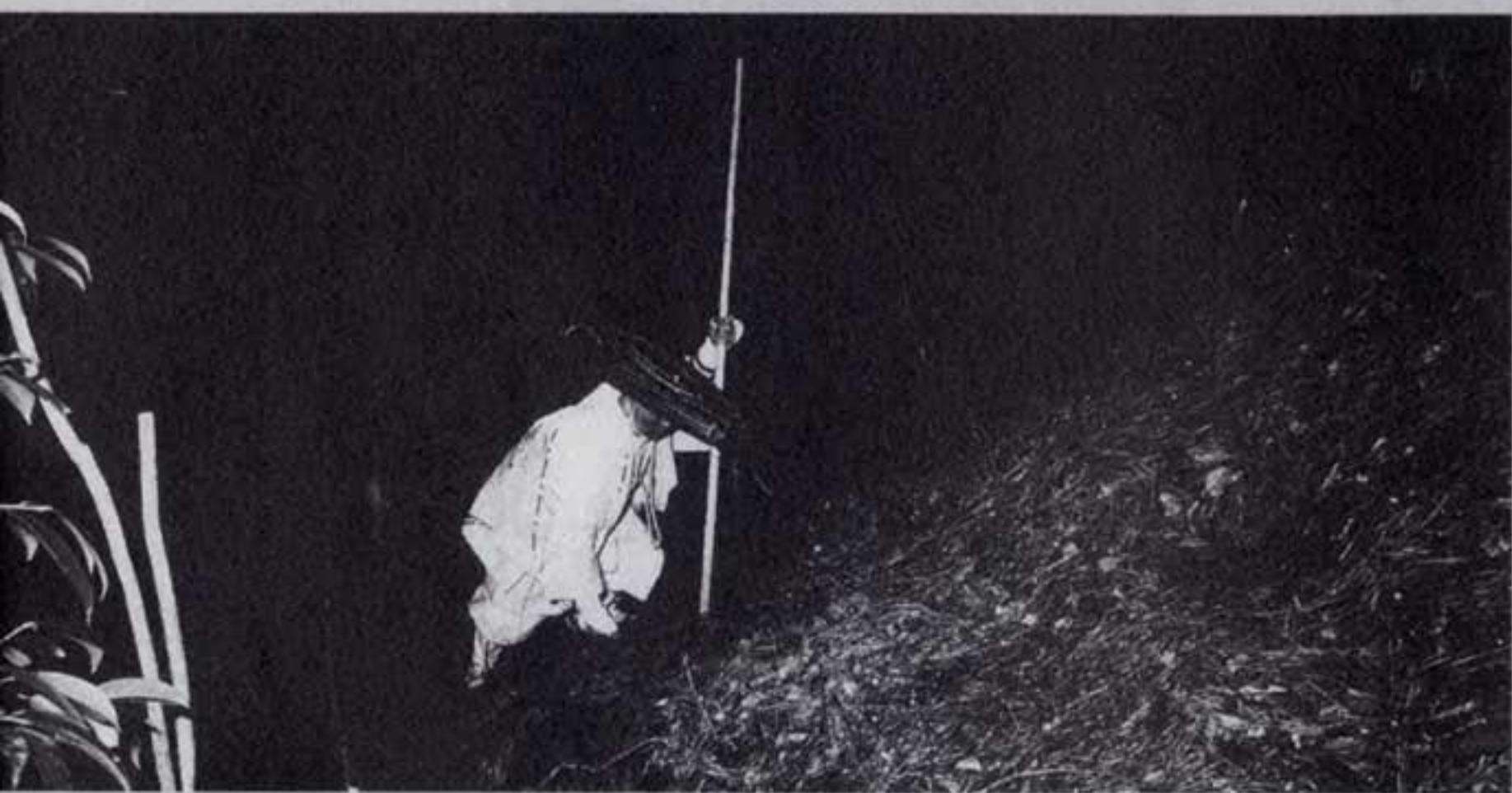
リしているのに、脇の下や背中がじつとりと汗ばんでくる。肩からかけたカメラの接眼部に水滴が一面に付着し、覗いても、水滴でぼやけて何も見えな

くなってしまったほどだ。

車がやっと通れるほどの狭い道も筈で掃いたあとがあり、三十段ほどの石段にも枯れ葉一枚落ちていなかったのを覚えている。その石段を登りきると、正面に木造の質素な不動堂があった。飯室長寿院の本堂だ。

この二年前に千日回峰行を終えた行者、酒井雄哉阿闍梨を訪ねてやってきた。千日回峰を終えた行者は信者たちから「生き仏」として崇められ、「阿闍梨」と尊敬の念をもって呼ばれている。それに「千日回峰」とか「阿闍梨」というなにか聞き慣れない言葉が加わり、わたしの想像力は大きくふくらんでいた。

八王子坂を登る



きらきらと輝く目、伸ばしほうだいの髭、雲をつくような大男。そんな怪僧を頭の中に想い浮かべていた。

実際はまったく異なっていた。

濃紺の作務衣を着た中年を過ぎたと思われる坊さんが、掃除をしていた。

頭も髭もきれいに剃った温厚で柔和な顔、赤子のような白い肌、どちらかというと小ぶりの体躯。この人が後に戦後始めての二千日回峰行をやったのける、酒井雄哉阿闍梨その人だった。

わたしは大変失礼で見当違いな想像をしていたのである。

回峰行というのは比叡の峰や谷、堂塔、霊跡、一木一草、一石一水にいたるまで礼拝して巡り歩く天台宗の修験

行で、延べ千日を七年間にわたって修行する。これを千日回峰行と呼んでいる。

酒井阿闍梨は昭和五十五年にこの千日回峰行を満行し、二千日を目指して



行を積み重ねている最中であつた。その回る道順、ルートというのは昔から定められており、変更は許されない。

一日の走破距離は約四十キロ、山の中である。しかも行者道と呼ばれてい

る、獣道のように幅が狭い道がその三分の一を占める。夜中に出発し明け方に戻ってくる。山の中で、平均時速約六キロの早さだ。これを千回繰り返す。

まあ私なら、こんなことをしようなどとは絶対に考えたりはしないことだ。それでも一大決心をして、そのルートを目中に一度だけ歩いてみようとしたことがある。カメラは小さいのを一台、交換レンズは無し、フィルム二、三本。カメラマンとしては、これ以上はないというほどの軽装である。

だが、へばつた。それどころではない。阿闍梨はふだんの半分以下の早さで歩いて先導しているにもかかわらず、追いつけない。とどこどこで立ち止

まり、にやにやしなながら、わたしを待っている。ついに完走ならず、全体の三分の二ぐらいでギブアップしてしまった。

その後、そのルートを何度かに分け



て歩き、やっと一通りのルートをこの目で見る事ができた。

酒井阿闍梨の回峰ルートを簡単に説明しておく、

飯室谷の長寿院を出発し、慈忍和尚

廟から西教寺を経て、坂本の町に入る。霊山院、滋賀院、生源寺ほかを回り、日吉神社から八王子坂を登る。神宮寺跡、慈覚大師廟から東塔へ。法然堂、本願堂、蓮如堂、総持坊、文殊楼、西尊院堂、明王堂、根本中堂、戒壇院、書院、大講堂、法華総持院東塔、阿弥陀堂、浄土院、長澄廟、山王院。次は西塔。椿堂、にない堂（法華堂、常行堂）、恵亮堂、釈迦堂。玉体杉を経て横川へ。根本如法塔、横川中堂、元三大師廟、四季講堂、恵心院、恵心僧都廟から一気に飯室坂をかけ降りて長寿院に戻る。

前述のように全長約四十キロ。雨の日も、風の日も、雪の日も歩く。毎日

ほとんど走っている



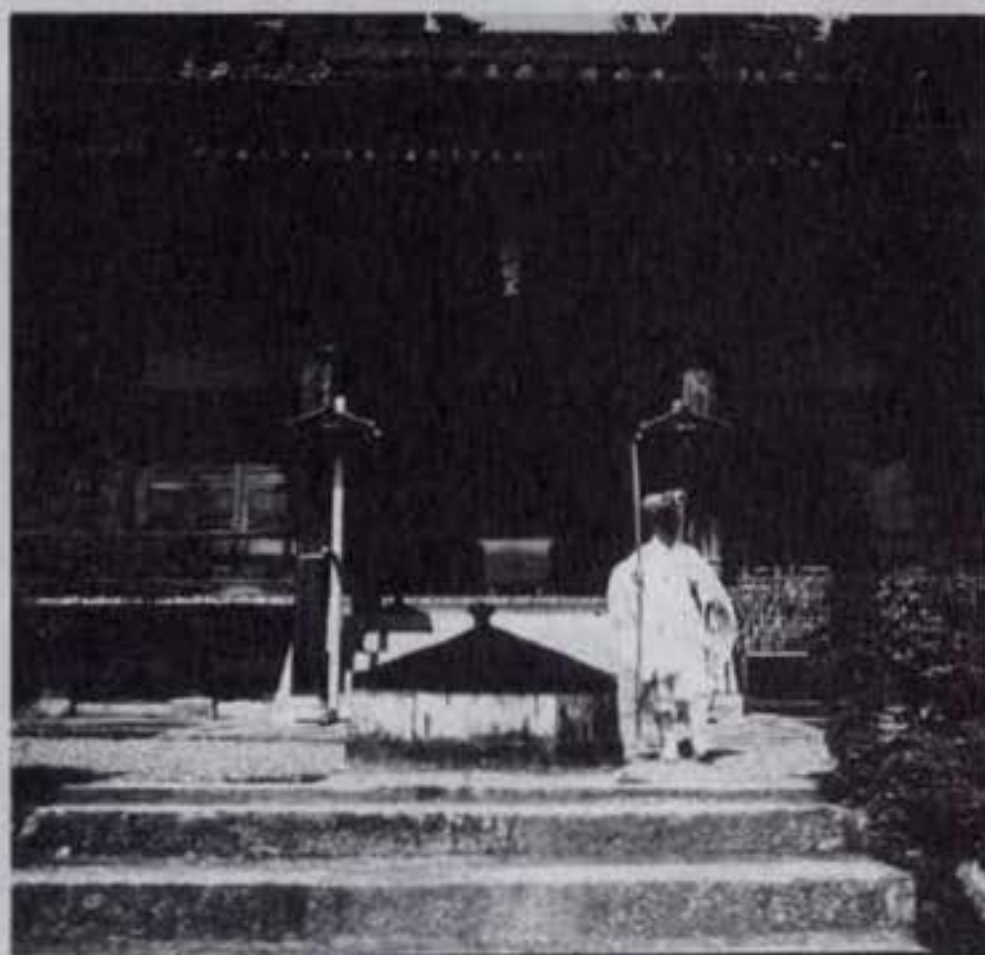
毎日……。

同じところを歩いてても退屈はしないという。草や木や花が日に日に少しずつ変化していく。そういった万物に目をやりながら、行をする、歩く。

回峰行というのは、行者本人も大変だが、それを支える人達がいることが案外見落とされている。毎年三月の末ごろから百日または二百日間の行が始まる。その二、三週間前から行者道の整備をする。歩くために邪魔な石を退けたり、木の枝を払ったりする。また、足に履くための草鞋が必要だ。一日に二足。民芸店で売っているようなものは役に立たない。ちよっと歩いただけで解けてばらばらになってしまう。数

少ない専門の職人に作ってもらわなければならぬ。

昭和六十二年の夏の真夜中、ちょう



ど酒井阿闍梨があと一日で二千日回峰行を満行するという日のことである。

鬱蒼とした木立ちの中の行者道を、

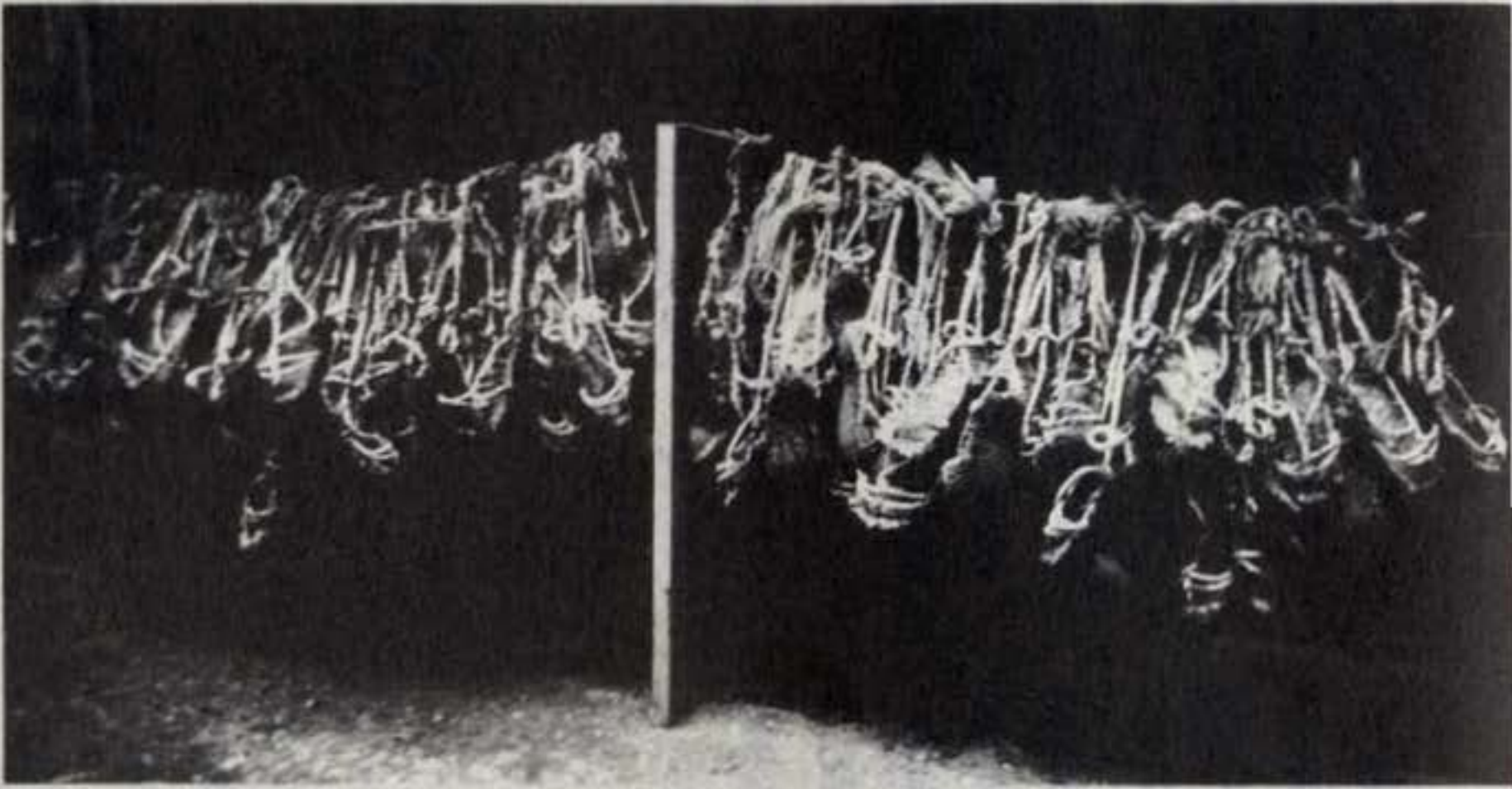
懐中電灯を頼りに撮影ポイントを探して歩いていった。場所を決めストロボをセツトし、行者が通り掛かるのを待つために、懐中電灯を消した。

すると、目の前に信じられないような光景が広がっていた。

真つ暗闇の中に無数の小さな明りが何の音もなく、不規則な曲線を描きながら動きまわっていた。満天の星がてんでんばらばらになって無軌道に動いているような情景である。びっくりした。一瞬の間、なにがなんだかわからなかった。

蛍だ。しかも源氏蛍。大きい。そしてあまりの数の多さに圧倒された。一度にこんなに数多くの蛍を見るのは始

回峰行に使ったわらし



めてだった。乱舞という言葉がびったり当てはまる光景だった。

暗闇の中の蛍の光り。ぼーっとなつて眺めていた。

「照千一隅」。

伝教大師最澄が記した『山家学生式』の冒頭にある言葉だ。一隅を照らす、という意味だそうである。

わたしが見た闇の中の蛍の光りと、この言葉は本来何の関係もない。だが、なぜかこのとき照千一隅という句を思い出し、ぼんやりと眺めていた。すると、闇の中の蛍はますます明るく輝き、乱舞し、なぜか、あたりがより明るく照らし出されていった。と、わたしには感じられた。

今現在説法

羽田恵三

春の選抜高校野球大会で宗門校のひとつであります、大阪の上宮高校が念願の初優勝を果たしました。

甲子園球場に、浄土宗の宗歌でもあり、上宮高校の校歌である「月影」の曲が五度流れ、テレビを通じ全国に一躍有名なものとなりました。

つきかげの 至らぬ里はなけれども

ながむる人の 心にぞすむ

胸の奥が熱くなる思いで聞かせて頂いたのは、私一人ではなかったと思います。

これは法然上人が、「光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨」と、『観無量寿経』に説かれた言葉のこころを、和歌に詠まれたものであります。

如来の光明は、遍く十方の世界を照らして、念仏の衆生を攝取（いだき抱えて）して捨てたまわず。

つまり、阿弥陀様のお慈悲の光明は、すべての処を照らして下さるが、お救いに預かることのできる人は、南無阿弥陀仏のお念仏を申す人であるという意味であります。

月の光は、山の上でも海の上でも、村も町も
限なく照らして下さるが、尊い光を仰ぐ事ので
きる人は「きれいなお月さま」と見上げた人に
してはじめて知る事のできる喜びであります。

阿弥陀如来は、西方極楽浄土より「今現在説
法」と、われら衆生を分けへだてなく育んでい
て下さるのでありますが、そのお慈悲を心に感
じ、尊い事と掌を合わせ、「南無阿弥陀仏」と
お念仏を申す人にして、お救いの実感を頂戴で
きるのであります。

例えて申すなら、親もとを遠く離れ、親の仕
送りを受けながら学校に通っている学生が、私
達衆生の姿でありましょう。

学生には優秀な方もおられますが、中には
「こんな姿、親が見たら何と思われるだろうか」
と、首をひねりたくなるような学生もおります。
それは悲しいかな、仕送りして下さる親の
心に気づかないから、平気でいられるのでし
う。

親がどんな想いで働き、またどんな苦勞をし
て仕送りしているか、親の情けに気づく事がで
きないから、平気でいられるのでしよう。ここ
に気づくか否かが、大きな分かれ道となって参
ります。

もう数年前になりますが、島根医科大学で日
本最初の「生体肝移植」が行なわれました。そ
の時に様々な意見を聞きましたが、感想として
述べられた多くのものは、

もし自分の可愛い子供が、そんな状況にな
った時、そのお父さんと同じように、何と
もない自分の体にメスを入れて、肝臓を分
けてあげる事ができるだろうか

等と、親の立場で感想が多かったように思いま
す。親の立場には案外立ち易いのですが、そう
ではなく、これは受ける側、つまり子供の立場
で考えて見るべきだと思います。

その患者は杉本祐也ちゃんというわずか一歳
の赤ん坊でした。もちろんお医者様も全力を尽

されたでしょうが、あの小さな赤ん坊が何度も何度も大変な危機を乗り越えて頑張りました。何とか成功して欲しいと願ったものでしたが、残念ながら、二百数十日でその願いも空しく消えてしまいました。

しかし、あの祐也ちゃんが、もし五歳、十歳、二十歳と成人するまで命があつたとしたら、どうでしょう。手術を受けた時は一歳の赤ん坊ですから、事の次第は判りませんが、成人する中でいつの日かその事実を知る日がきつとやつて来た事でしょう。それを知った時、おそらくこの人の生き方、物の考え方は大きく変つたことでしょう。

私は知らなかったけれど、あの時にお父さんが、勇気をふるって我が体にメスを入れて下さらなかったら、とても私は今日まで生きて来る事はできなかった。

と、気づいた時、おそらく大きな方向転換があつた事だと思います。そこに気がつくか否かに

大きな分かれ道があると思います。

私は親の体にメスを入れてこの肝臓を、心臓を貰った訳ではないけれど、この体のそのまゝを、父と母とを縁として、すべて頂いたものがあります。

その父母もすでに、浄土へ参っておりますが、父はすでに二十数年前、そして母が昭和天皇と同じ、平成元年の八月五日に浄土へと旅立つて参りました。

最後に一枚の短冊、

生きつぎし 我が生涯の七十年

世の人々に手を合わせて往くと書き残しておりました。

生きつぎしと言うのは、ちやうど還暦を迎える年に、生きるか死ぬかの心臓の大手術をいたしました。その事を指したものだと思います。その時は、顔も知らない、名前も知らない方々の沢山の血液を頂き、多くの方々のお世話になり、麻酔の暗黒から再び光明の世界に帰った時、

「新しい命」を頂いたと喜びました。だから残る命は、せめて人様のお役に立ちたいと願いながら過ごしたようでした。

そして亡くなる一年ほど前に、胃癌の摘出手術を受けました。

手術の後、先生が「これがそうです」と取り出した物を見せて下さいました。今に思えば、別れた時以上にその時が悲しかった。涙がこぼれてこぼれて仕方が無かった。

半年と言われた命でしたが、命冥加があったのか一年の命を頂戴しました。

亡くなる一週間ほど前のことでした。七月の末に故郷のお寺を訪ねてみますと、暑いさなかの事ですから、部屋には冷房も入れて兄夫婦が十分な看病をしてくれていました。

母の枕もとを訪ねてみると、

「今日はね、小さい頃からずっと眺めてきた、あのきれいな山が寝たまんまで見渡せる、自然の風がいっぱい入ってくるあの

お座敷で一日寝てみたいなあ」

「ああそう、それならお布団移そうか」

そこで、布団を座敷へ移しました。もうその時はほんとに骨と皮。よくこれで生きてられるなと思うくらい痩せていました。しかしそんな体になりながらも、最後の三日を除いては自分でお手洗も行くような気丈な母でした。

だから、その日も自分で歩くと申しました。いつも側にいてあげることもできませんので、

「今日はせめて私におんぶさせてよ」と無理やり母を背中におんぶして座敷までのわずかな距離ですが、歩かせて頂きました。

半分ほど歩いたでしうか、痩せ細った母の骨が歩きたびに私の背中にコツコツと当って、おんぶしている方が痛いのです。しかしそんな事も、母をおろすと同時にスーッと忘れてしまっていました。

やがて悲しい別れの日が参りました。初七日、二七日、三七日……と中陰をつとめますなか

に、いろいろな方が思い出話をして下さる。

「ああ、あんな事もあった。こんな事もあった。」

「ああもしてあげれば良かった、こうもしてあげられたのに……」

ここまででは誰でも思うことではないでしようか、どれほど孝養を尽された方でも、別れの後にきつと思われることでしよう。

しかし、その同じ心の中に、

「ああもしてあげた、こうもしてあげた」と、そんな思いがないでしようか。

私は、それを思った時、母をおんぶした日のことを思いました。

せめて最後の親孝行のつもりで母をおんぶしました。でもおんぶされた方はどうだったでしょう。背負った方があれだけ痛いのです。背負われた方はそれ以上に痛かったはずです。

一言の愚痴も言わず、苦しみを辛抱して、よく考えてみたら、最後の親孝行をさせてくれた

のだということに、ずい分時間が経って気づかされました。

そう思いますと、「さあ、私は一度も見ることとは無かったが、この母にどれほどの涙をこぼさせたことだろう。私のためにどんなに辛い思いをさせた事だろうか」と思いました時、すでに小さなお骨箱に納められた母に、白木の位牌に心から念仏申さずにはおれませんでした。

親思う 思いも親の思わする

思いと知って 親思うかな

この世で、父と呼び、母と呼び合った仲ですらこのとおりであります。まして三世を通し、今現在説法とみ守りお育て下さる阿弥陀如来の親心は、いかばかりでしょう。

つきかげの いたらぬ里はなけれども

眺むる人の 心にぞすむ

桜花咲き誇る春の日に、しみじみとほんとうにしみじみと聞かせて頂きました。

(京都大善寺住職)

手助けする、ということ



夏 攸吾

私^{あたし}ら夫婦には、子がない。できない、とわかつたときの落胆いうまでもなく、ことに、かみさんの消沈は痛ましかったが、私らはそこで、子は授かりものという、授からないものはしやうがないと、腹をくくった。

ちやうど試験管ベビーが騒がれたころのこと、考えないではなかったが、悩みはしなかった。

そこまでして、生命^{いのち}をいじりたくはなかったのである。主治医もそのことにはふれず、ただ「あきらめてください」といった。

☆

それからは子の話になると、「私にや子種がない」ことにしている。呑ん兵衛だから精子が酔っぱらって役にたたんだ、と。するとなぜ

だか、気色悪いにやにや笑いする男や、きらきら瞳輝かせる女があつたりして、なんのこつちやようわからんのだけれども、困った世の中だ。

☆

子育てばなし愚痴り趣味、なんてのも、困つたもん。で、そういう人に限つて、つくつた子、わがもの、なんですね。できた子、授かりもの、別個の生命、育つのを助ける、という素直さがない。親ばなれ子ばなれ、生まれたときから。そんなの、自分が生きてきて、よくわかつてるはず。それをいうと、ちくり痛いところを突つつかれ、開きなおつて「子のないあんたにやわかない」とくる。ごめんなさいよと、引き下がるしかない。

☆

いい料理人てものは、素材の持ち味を上手に生かす。なるべく手をかけない、かけてもそのようには見せないのが、腕である。活き造りみ

たいな、これ見よがしを善しとしない。そうして、料理を「できました」という、決して「こさえました」とはいわない。りっぱに、生命の手助けの仕事。

私は自分でも包丁をもつから、料理人のはたらきが見える小料理屋が好きで通う。ひとつひとつの料理よりも、素材を無駄なく使い、料理ができたときにはきれいに片づいてもいる、手ぎわのよさにまなぶ。おいしく吞み食いさせてもらいながら、ちやつかり門前の小僧。じつにどうも、申しわけないくらい、ありがたい。

いま男にも人気とやらの料理教室で、いったいなにを教わるのか、不思議でならない。

☆

いい酒を造る仕事も、生命の手助けである。ご存じのとおり酒は、米と水と人。並行複発酵という、きわめつき微妙な生命のはたらきによって育まれる。

それくらい識っておくのが吞ん兵衛の心得つてもんだらうから、雪国の銘醸蔵に寝泊りして手伝わせてもらったことがある。

醸造酒のなかで世界一アルコール度の高い、酒を醸すのはすぐれた発酵技術だが、私がほれた大杜氏はそれを「手助けの仕事」という。いい米といい水を得て、いい酒に育つのを見守り、少し手をかす、と。

☆

いい酒は、それを造る人をも磨くものらしい。酒を醸していく仕事のながれのなかで、いくつもある勘どころ、筋目のひとつ、麴づくり。両手にすくって拌むように、慈しんで麴の育ちぐあいをみる、大杜氏の姿に手助けの真髄。ややあつてほつと和ませたおだやかな顔、その鼻の頭に麴の小さな粒がひとつ、まつわりついていた…。

☆

人は、文明を進歩させたそのぶん、傲慢になったのは確かなことだ。世話になり、共存していくのが道理の自然を、踏みにじり、さんざ痛めつけといてから、「保護」だなんて。そんなに入って、偉かったのか。

牛肉を食うのは文明で、鯨肉を食うのは野蛮ときめつける、欧米の態度は高慢なひとりよがり。だが、日本人もまた似たような不遜の心を抱いてはいないか。

☆

生命あるものには、人に限らず、生来備わった自然治癒力。それが病を克服し生命ながらえようとする、その手助けをするのが医療の本質である。なのにいまは、人が人の生命をいじりすぎる。そんな世の中だから、ほかの生命をいじるのに、露ほどの懸念もないらしい。困ったことだ。

なんでもつくれる、どうにでもできると考え

る、とんでもない思いあがりか怖い。

☆

バイオテクノロジー、生命工学なんて名からして、おこがましい匂い。食糧革命のエースなどともてはやし、生命をいじることによる弊害、奇形とか安全性の不安とか、生態系の惑乱とかの危惧には目をつぶりがねない。

きつと、私なんかより遥かにすぐれた頭の持ち主だろう、それだけに悪魔的な誘惑に脆^{もろ}そう。な研究者たちが、怖い。生命をいじるのではなく、生命の手助けをする研究が、いくらでもあるじゃないですか。

☆

たとえば水産は、水に生きる生命を粗末にしないこと。ことに生命の母なる海は、いまでも圧倒的な未知の世界にゆたかな資源を抱く。

農産は、土を生かし、そこにみずから育つ作物の手助けをすること。

ところがいま、恐ろしいことには、そんなまっとうな漁業、農業はかけらほどしかない。飼料づけの養殖の海、農薬と肥料づけの田畑など。しかも、その責任の大半は漁民や農民にあるのではない。

☆

口惜しいことだが、その責任の一端は消費者にもある。思えば私ら、こと食に関してはずいぶん無知になったもんだ、無茶食いである、節操^{せうさう}てものがなくなりましたね。

マグロとかエビとか、偏った嗜好をするでしよ。まっすぐなキュウリとか、すらりとしたダイコンとか、見てくれで選ぶでしよ。はつきりいって、食の偏執ですわね。

安心して食べられる、まっとうなものを育てるのは容易じゃないが、まがいものの、見てくれならばいくらでも作れるのである。

☆

今年、私の若き友が、百姓になった。後を継いだんじゃない。都会生まれが、土地を借りて、生命の手助けをはじめたのである。無農薬の「^{へた}帯」の匂いのするトマトを食べさせますよ」といつてくれる。うれしい。

私は彼を支援する、ということとは負担するのだ。賛辞だけじゃ支援にならない。

いま、消費者がしなければならぬ協力は、まっとうな生産者への支援だ。それがひいては、自分の生命の手助けにもなる。

☆

こんないい話があるかと思うと、とんでもない話もある。やはり私の友、富士の麓で家畜の生命を主題に動物農場を経営する男はいま、キャンプ場を略奪されそうな危機に直面している。子らに自然を体感させ、いきいきした生命を育もうとする場を、理不尽にも奪おうとする勢力と闘っている。

苦戦である。「生命を見たことがありますか」と問うても、なんのこっちゃわからんような奴が相手なのは、困ったことだ。

☆

ところで——。こうして文を書いてる私は、どうだろう。いい気なもんで、つくってるつもりでいたのだが、これだってほんとは、浮かんできたもの、できてきたものである。

よくぞ、と感心する精密なできばえをした体の、なかでも巧緻な頭脳の、摩訶なはたらきによるのであって、考えるということは、その手助け程度に、ちがいない。

するってえと、しかし、私の頭脳の生命力とはどれほどのものか、それを自分でどれだけ手助けができているのか：考えると、だんだん自信がなくなってくるのだ。

思いあがりも困るが、自信をなくすってのも、これまた困ったことである。

(作家)

生前葬儀

■大室了皓

檀家のある婦人が真剣な顔つきで言う。

「いま建築中の本堂が完成したら、私の願いを是非とも聞き届けてほしい」と。

黙って聞いていたら「お葬式を」と言う。既に生前戒名を授けてあるので、予想もしないその言葉に呆然として、返答に困っていると、「どうしても」と重ねて懇願する。

住職して四十三年間、初めての事である。生

前葬儀のことなど現実には考えた事もない。『宗定法要集』にも見た事がないし、誰かが行なったという噂話さえも聞いた事がない。

黙って考え込む私を見て、断られるかと思つたのだろうか、今度は、

「なんとしても」という哀願の言葉に変わっていった。

イエスカノーか。

イエスと答えれば相手は喜ぶに決まっているが、こちらは苦しまねばならない。ノーと言えば彼女は落胆し、住職や寺に対する期待を裏切る事になる。生前葬儀についてのノウハウなどはまったく持っていない私は窮地に追い込まれてしまった。

「この次までに考えて置く」と返答を来月の寺参りまで伸ばそうとした。

ところがである。

「諸行無常と、何時も教えて下さっているではありませんか。明日の事は分かりません。いますぐご返事をお願いいたします。そうでないと今日は眠れません。」

そこまで懇願されては逃げるわけにはいかない。やるしかないと開き直った末、

「分かった。やってあげよう」

と約束してしまった。

その後、女優の水の江滝子さんが生前葬を都

内のホテルで行なったという事を聞いて、その報道のコピーを知人から頂いた。

テレビで見たと言う人からも、その様子を伺った。

森繁久彌さんが葬儀委員長を勤め、涙ながらの弔辞などもあつて、参列者を感激させたと言う。

その報道写真を見ると、若い日の美しい彼女の写真が、花に囲まれて遺影のように正面に飾られ、一段下がって「水の江滝子」と書かれた白い位牌が花に埋まって置かれ、ロウソクも両側に数本ずつ立てられている。

当の本人は正面から右にずれたところに、ロングドレスに身を包み大きな椅子にかけていかにも楽しそうに笑っている。

参列者からの献花があつたかどうかは分からなかったが、記事によると、五百人ほどの人が集まって笑顔が溢れ、明るい「お葬式」だった

そうだ。

「お遊びみたいだな」一言漏らすと、

「だって、涙を流して弔辞を読んでいたそうよ。」

「みんな役者さんだろう。家族を亡くして悲しい時でもアハハと笑い、嬉しい時だって、哀れを誘うような悲しい涙を流すことが出来なければ一人前ではない筈だ。そんな虚構の姿に感動するのは愚かなことではないか。」

「だって」と一人が言ったが、

「それにだね、五百人集まったと聞くが、変わった事をする人だ、死んだ後なら傍の人しか分からないが、生前葬儀では本人には誰が来てくれたのか瞭然と分かってしまう。

行かなければ不義理な人よ、と陰口を言われるかも知れない。今後のつき合いもある事だから、無理をしてでも出かけよう。そういう人だって沢山いたかも知れないよ」

と言ったが、誰も反論しなかった。

しかし、それはこちらの勝手な想像で、ご本人はきっと深く考えての事だろう。

長い人生、お世話になった人々に深い感謝の心を伝え、今まで歩んで来た越し方を顧みて人様に迷惑を掛けた事、知らず知らずに犯して来た罪の許しを請い、生まれ変わった気持ちになつて、これからの残された短い人生を歩んで行くこうとする決意を固め、参会者にそれを誓おうとしたのかも知れない。

無宗教の葬儀に幾度か参列した事がある。開式の言葉が終わると荘重な曲が流され、時には弔辞が読まれ、弔問者は次々と祭壇に進み出て、遺族に一礼し恭しく献花して席に戻る。すべての人献花が終了したところで、遺族がお礼の挨拶をして式は終わる。

集団葬儀、複数の遭難事故で、宗教を異にする方々の合同葬などはやむを得ないが、これは事故責任を負うべき企業体などがその責任上遺

族の心情を察して行なうもので、遭難者の遺族はそれぞれ別個に葬儀を執り行なつての後の儀式である。

ところが個人の場合はまったく違う。慣れない私には何か欠けているような気がしてならない。

葬儀ではなくて、単なるお別れの儀式の感があるからだ。またそう言つた方が納得できる。

それが神であろうが仏であろうが、人間以上のものへの祈りを欠いては、バイバイと道で別れを告げるような軽々しさが拭い切れないのである。

道端の土くれと化してしまう、大事な人を土くれに貶める不敬な行ないと言うのは過言であろうか。

極楽へ仏のみ許へ、天国へ神のみ許へ亡き人を送る儀式、これが葬儀と考えている私にとっては理解し難い。

もつとも僧職者である私が、様々の葬儀に出合つて、それを執行する聖職者の態度に落胆したり、儀式の運び方に疑問を抱く事も少なくない。

儀式それ自体が布教活動の一つでなければならないと、何時も反省し自戒するから特にその感を強くするのであるが、儀式を執行する立場にある私でさえ不満に思うのであるから、一般の人の中には聖職者の祈りの言葉や読経を、儀式における単なるB・G・Mのように受け取り、葬儀を単純な通過儀礼として軽く考えている人があるのもやむを得ないであろう。

規模が大きくなると、特にこの感を深めるのである。

とすれば、無宗教葬儀を無下に非難する事は出来ない。

このように考えてくると、さきの水の江滝子さんの生前葬儀も或いはと、思い直すのである。さて話を元に戻さねばならない。

さきの彼女が生前葬儀を希望するのは次の理由からであった。

一、数多くの葬儀に列席して感じるのは、

●亡き人を悼むべきなのに、現実ほとんど亡き人は義理で焼香に来ている。

したがって行列中も、遠慮もなく私語を交わし、中には死者に対する不敬な噂話をする人さえあって不愉快になる。

自分もまた義理でやむなく出かける事が少なくない。死は突然なので、仕事の予定を変更して時間を作るのが容易でない。また商談相手に対しても、予定変更の了解を求め、迷惑を掛ける事になる。

自分の時には義理では来てもらいたくない。心から悲しんで下さる人にだけ来て頂きたい。

また義理の人達に、わざわざ来て頂くような迷惑を掛けたくない。

●弔問や焼香に誰が来て下さっているのか当の本人はこれを知ることができない。

多忙な仕事の都合をやりくりして、また遠路、時には厳寒・酷暑の中を来て下さる方に感謝の心を表すことが出来ない。

残った者が私の思うようにしてくれるだろうか不安だ。

二、独身だから、

●誰が喪主となって取り運んでくれるだろうか。

兄弟姉妹はいるけれども、それほど親しくはしていない。数年前まで親の遺産相続をめぐる骨肉の争いがあった。すべて解決はしているが、しこりは今も残って付き合いはほとんどしていない。喪主にはなってもらいたくない者ばかりだ。

懇意な人々の中には、最後の世話を進んでして下さる方もあろうが、こちらが

お世話になつてゐる方々だから、通夜や葬儀の慌ただしい事々の世話などをして頂くのは申し訳ない。またお礼のしようがない。

●葬儀のあと、

私は病気がちで長生きは出来そうもない事を兄弟姉妹たちはよく知つていて、私の遺産を狙つてゐるようだが、私には贈与の意志はない。

財産処分は生きてゐる間に自分の意志で思い残す事のないように、後の人々に迷惑の掛からないようにしたい。

また後々の供養をしかるべき人に納得して頼んでおきたい。

三、他人の葬儀は知つてゐるが、この世で最後の大事な儀式を自分の目でしっかり確認し、安心して死を迎えたい。
と、心中をしみじみ語るのであった。

引き受けたからには、彼女が感動する儀式を行なわねばならない。

前例のない事なので、法式に詳しい方々にも教えを乞ひ、二か月ほど考え抜いた末に漸く次のように差定（儀式の執り運び方、内容）を決めることが出来た。

●五重相伝に倣つて行なう。

正式には五日を要するが、それは不可能なので、一時間半以内に納める。

道場は、外陣に釈迦三尊仏を祀り、白布を敷き、片側に水色の花を、一方には火を表す赤色の花を並べて二河白道を、内陣は密室道場にしたらえる。

道場に入る前に、暗くした別室で受者と二人だけで、僅かな灯火によつて二河白道の掛け軸を見せ、白道を渡る事などについて説戒する。
次に別室で余人を交えず独り端座させる。

（この間、導師は儀式のための衣帯に着がえる）

受者は塗香、触香、灌頂のあと侍者に導かれ、
笙の音の響く堂内へ入り、釈尊前に着座し、焼
香、三礼、転座して、釈尊の斜め右側に着座。

導師入堂（シンセサイザー演奏うちに）。

釈尊前着座、焼香、三礼。

三奉請散華、懺悔、十念、歎仏偈。

引導、十念。

白道説戒。奏樂（笙）。

受者転座、焼香、三礼、転座。導師先導して

受者は白道を歩み内陣へ進み、本尊を斜め背に
して着座。

（本尊前には受者の朱筆位牌を置く）

導師登高座。

密室道場についての説戒。下高座。

一尊哀愍（散華）、登高座。

開經偈、誦經（参列者焼香）。

撰益文、念仏一会。

来迎和讃（シンセ伴奏）。

回向、十念。

授手印（手次）。

洒水、手次、日課勸奨。

導師 本尊前転座（笙）。

奉告、同唱十念。

導師、高座へ復座、無言三礼、退堂、受者続

いて退堂（シンセサイザー奏樂）。

以上のような取り運びを決めたが、生前であ
るがために、苦勞したのが、

一、引導文

分かりやすくしなければとは思ったものの、
口語では重みがない、文語体にして一句一句
分かって貰わなくてはならない。しかも莊重
に。

二、回向

追善菩提と言って済ます訳にはいかない。

目の前に本人がいるのであるからだ。

浄土に往生した事をどのように説いたらよ

いか。そしてこれからの生き方についても。

三、説戒と本尊弥陀如来への奉告はどのようなようにしたら受者に通じ、感動させる事ができるか。

導師、維那、侍者、証明師の四人が分胆を決めて流れるように執り行なう事も課題だった。

四、受者の服装

白い浄衣を着せる事も考えたが、モダンなキヤリアウーマンなので、白地の着物を作らせ、銀色の輪袈裟を掛けさせた。後で聞いたら、帯はこのために着物に合うように作ったそうだ。

葬儀となれば、多額の費用を要するから、それを考えれば、と後で語っていた。

なお、これはお祝いですかと聞くので、お浄土へ行くことの儀式だからお祝いだと答えた。

かくして無事に終える事が出来た。

弔問客（参列者）はたったの八人。うち二人は大阪から飛んで来ていた。

それから華やかに祝宴が催されたが、参列者にとっても初めての経験なので、どのような感想を語るか気になった。

まず当然の本人だが、

「式の間、感激のあまり体の震えが止まらなかった。ご住職にお礼の申し上げようもない生まれ変わったような心境です」

と深々と頭を畳にすりつけて感謝し、参列者の一人一人は、

「お葬式の意義を初めて知ることができた。これほど大切に尊いものとは知らなかった。そして厳粛な雰囲気にかく感激した。一時間以上の式だったのに、とても短く感じた。出来る事なら私も生前葬をしたい」

と異口同音に語り合っていた。

そして私は質問攻めにあったが、二か月間の苦労が実った思いで、頂く祝杯が心に泌みて来た。

（東京教区長・光取寺住職）

法 然 上 人 鑽 仰 会 会 則

第一条 (名称)

本会は、法然上人鑽仰会と称する。

第二条 (事務所)

本会の事務所を東京都港区芝公園4-7-4明照会館内に置く。

第三条 (目的)

本会は、法然上人の立教の精神に立脚し、時機相応の念仏信仰を幅広く強力に推進することを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

- (1) 法然上人の顕彰に関する行事及び事業。
- (2) 時代に即応する教学教化の研究と念仏業の実践。
- (3) 在家伝道者の養成教育活動。
- (4) 会員の資質向上のための研鑽活動。
- (5) 雑誌『浄土』その他刊行物の発行。
- (6) 会員相互の親睦と情報交換。
- (7) その他、前各号に関連する事業。

第五条 (会員)

第二条の目的に賛同する者で、理事二名以上の推薦を得て、理事会が入会を認めた者を、本会の会員とする。

第六条 (顧問及び役員)

本会は、次の顧問及び役員を置く。

- | | |
|--------|-----|
| (1) 顧問 | 若干名 |
| (2) 役員 | |
| ① 会長 | 一名 |
| ② 副会長 | 二名 |
| ③ 理事長 | 一名 |
| ④ 常任理事 | 若干名 |
| ⑤ 理事 | 若干名 |

第七条 (顧問及び役員の職務)

顧問及び役員の職務は次の通りとする。

- | | | |
|---|---------|----|
| (1) 顧問は、本会の相談役として会長の諮問に応える。 | ⑥ 事務局次長 | 一名 |
| (2) 会長は、会務を総理し、本会を代表する。 | ⑦ 事務局次長 | 一名 |
| (3) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。 | ⑧ 会 計 | 二名 |
| (4) 理事長は、本会を統括する。 | ⑨ 監 事 | 二名 |
| (5) 常任理事は、本会の実務を分掌する。 | | |
| (6) 事務局次長は、本会の事務を執行する。 | | |
| (7) 事務局次長は、事務局次長を補佐し、事務局次長に事故あるときは、その職務を代行する。 | | |
| (8) 理事は、本会の企画、運営にあたる。 | | |
| (9) 会計は、本会の会計を掌理し、金銭の出納を司る。 | | |
| (10) 監事は、本会の会務及び会計を監査する。 | | |

第八条 (顧問及び役員の選出方法)

顧問及び役員の選出方法は次の通りとする。

- (1) 顧問は、学識経験者中より理事会が推薦し、会長が委嘱する。
- (2) 会長、副会長及び監事は、いずれも会員の中から総会において選出する。
- (3) 理事長及び常任理事は、理事会が推薦し、会長が委嘱する。
- (4) 理事は、会員の中から選出し、会長が委嘱する。
- (5) 事務局次長、事務局次長及び会計は、会員の中から、会長が委嘱する。

第九条 (役員の任期)

役員の任期は次の通りとする。

- (1) 役員の任期は三年とし、再任を妨げない。
- (2) 役員に欠員が生じたときは、補欠役員を選出するものとし、その任期は前任者の残任期間とする。

第十条 (会議)

本会の会議は、総会、理事会、役員会、及び顧問会とする。

第十一条 (総会の種類及び手続き)

- (1) 総会は、定時総会及び臨時総会とし、定時総会は年一回、臨時総会は必要に応じ随時に会長がこれを招集する。
- (2) 総会の招集通知は、議案を示して会日の十四日前までに発しななければならない。
- (3) 総会の議長は、その都度互選によって選出する。
- (4) 総会の議案は、本会則で定める場合を除き出席者の過半数で決する。

第十二条 (総会の議決事項)

総会は本会則で別に定める場合のほか次の事項を議決する。

- (1) 事業計画及び予算の承認。
- (2) 事業報告及び決算の承認。
- (3) 役員会が総会に付することを必要と認めた重要事項。

第十三条 (理事会及び役員会)

- (1) 理事会は必要に応じ会長が招集し、理事長がその議長となる。
- (2) 理事会は会運営の議決審議機関であって、議長は出席者の過半数で決し、可否同数の場合は議長の決するところとする。
- (3) 役員会は会運営執行機関であって、基本構想及び企画にあたり、会長、副会長、理事長、常任理事、事務局長をもって組織する。

第十四条 (顧問会)

会長は必要に応じ顧問会を開き重要事項に関して諮問することができ。但し、会長が随時各顧問に対し諮問することを妨げない。

第十五条 (事務局会)

- (1) 事務局に、総務、財務、組織の各部及び「浄土」編集部を置く。
- (2) 事務局規定は別に定める。

第十六条 (会計)

- (1) 本会の経費は年会費、寄付金、刊行物の売上金、その他の収

入によって支弁する。

- (2) 年会費は次の四種類とし、会費額は総会で決定する。

- ① 特別会費 一、〇〇〇、〇〇〇円
- ② 維持会費 二〇〇、〇〇〇円
- ③ 一般会費 三〇、〇〇〇円
- ④ 購読会費 六、〇〇〇円

- (3) 会計年度はその年の四月一日に始まり、次の年の三月末日に終わる。

第十七条 (会員の特典)

本会の会員は、雑誌「浄土」及び本会のトラフトの送受、配布及び行事への参加が出来ます。

第十八条 (会則の改正)

本会則の改正は、総会において出席者の三分の二以上の多数によって行なう。

【付則】

- (1) 本会は平成五年四月二日付けて法然上人鑽仰会と浄土宗浄業会が合体し設立した。
- (2) 本会則は、平成五年四月二日より施行する。

《お知らせ》

この度、新事務所・電話、並びに新口座を開致致しましたのでお知らせ致します。ご連絡及び会費の納入の際に、ご利用下さい。

〔事務所〕 ☎一〇五 東京都港区芝公園四一七一四

明照会館四階

〔口座〕

☎〇三一二五七八一六九四七

① さくら銀行 芝大門支店

*口座名 法然上人鑽仰会

*店番 六二四

*口座番号 普通 六三二九九三三

② 郵便局

*口座名 法然上人鑽仰会

*口座番号 東京八二二一八七

●雑誌「浄土」が「浄土」らしくなくなつたという評をずいぶん聞かされた。ついでに賛否の声もついていけばいいのだが、これはあまりない。ただ、「これでは施本にならないからよくない」という意見が比較的、中央より地方の読者に多かったという報告を担当者から受けたのは事実である。断わっておくが、当初、この雑誌の編集をひき受けるに当たって一番めに心がけたのは、活字の大きさだった。どうしても年輩の読者が多いので、という要望に対し、ギリギリ妥協したのが本誌本文中の行間と活字の大きさであつて、あとは読者のターゲットを寺庭婦人に絞つたことだろう。したがって、施本を作る意志など毛頭なかったのだから、その種の意見が寄せられるのは当然すぎる話だったといつていいのである。

●今号から随想のテーマを「死」に置いて原稿の依頼をした。いうまでもなく、人間誰しも決して避けては通れぬ「死」を見つめてのエッセーはあと何号が続くはずである。「地獄から浄土を仰ぐ」を執筆してくださった平光善久氏は岐阜市在住の隻脚の詩人で、現代詩人会に所属し、先には中日詩人会の会長もつとめたり、自ら不動工房という印刷所で詩集の刊行に精を出したり

もしている。華中戦線で死の代償として喪つた左足の傷あとが近頃しきりに痛んでならない、と電話口で伝えていたのが気になってならない。

●先号にひき続き、利根川裕氏に執筆をお願いした。氏はテレビ朝日系で「トウナイト」という番組のキャスターを十余年間、一日の休みもなく続けている超多忙人間だが、文中にもある師、亀井勝一郎氏の『大和古寺風物誌』のような作品にも意欲を燃やしてくれている。

●梅雨明けも間近に迫り、盆が近づくと施本の見本誌が毎日のように送り届けられる。出来不出来はさまざまだが、コストを計算して作られる極小冊子に各社なりの工夫がこめられていて、こちらもついつい作り手の苦勞がしのばれて同情したりもしてしまう。施本は、施本でございといった体裁をしていなくても、たとえば巷の週刊誌だって、扱いようによつては立派な教化伝道の具になり得ることをぜひ考えていただきたいものである。

●同時に、私たちが作っているのはブックではなくマガジンである。雑誌は書籍のような重さがあつては雑誌でなくなる。そして、雑誌の世界の勝負は常に意外性にあると固く信じていたい。

(編集チーフ・小川有順)

●お詫び

去る四月に法然上人讃仰会と浄土宗浄業会が合併して、新法然上人讃仰会が再組織され、現代のニーズに相応した信仰運動が展開されることとなりました。その後数カ月を経過しましたが、旧事務所大道社から新事務所明照会館への移転をはじめ、新会則による会員各位の移行手続き、それに伴う会費精算等に思わぬ時間がかかり、併せて、本会の中核をなす「浄土」誌の刊行が、四月特別増大号以降遅延をいたし、会員読者各位には大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ようやく見通しがつき、準備期間として五・六月を合併にさせていただき、今後もしばらく毎月発行予定が遅れますが、事情ご賢察の上今しばらくご理解の程よろしくお願い申し上げます。(編集人・宮林昭彦)

浄土 五十九巻 五・六月合併号 価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成五年五月二十五日

発行——平成五年六月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——文化カラー印刷株式会社

写植印字——文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人讃仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

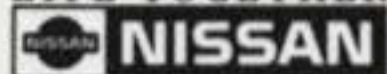
結局、 黒ラベル。



いつでも・どこでも・誰とでも……
楽しく飲めるく黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

浄土 第五十九巻 第六号 (毎月一回一日発行)

平成五年六月一日発行 昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

すっきりが、いい。

新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo:ローレル25ツインカムメダリスト(オプション装着車)



松方は、**こ**りゃあいいと思った。

◎本木は、**な**るほどと感心した。

◎松方・**◎**本木の**◎**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル25ツインカムメダリスト-----全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(6気筒ツインカム・総排気量2496cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フロンツ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オープンセーフフルオートエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823-----お近くのローレル販売会社へ